

## グリム童話のなかの飲食物

野口 芳子

はじめに

グリム童話のなかにはどのような飲食物が頻出するのだろうか。頻出する飲食物は現代のそれとは同じなのだろうか、それとも異なるのだろうか。異なるとすれば、その理由は何なのか。本論では、まず二一話収録されているグリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』<sup>[1]</sup>に出現する飲食物をすべて調べて、頻出度の高いものを抽出する。その後、その飲食物が、どのような文脈で出現するのかを確認しながら、昔の人々の生活のなかでその飲食物が持つ意味や役割について考察していく。

最初に、頻出度の高い順に四〇種類取り上げて、出現話数を明示した表を作成する。次に上位六位の飲食物、①パン、②水、③ワイン、④肉、⑤林檎、⑥ミルクについて詳しく見ていく。その後、現在のドイツの食生活を代表する飲食物、⑩ビール、⑫キャベツ、⑭ソーセイジ、⑮じゃがいもについても出現話

数が多い順に考察する。

### 1. 頻出度が高い飲食物について

(1) ①位 パン (Brot) 六三話  
 一番多いのは「粗末な食事として出現するパン」で、二〇話 (KHM 11, 13, 15, 16, 20, 25, 44, 59, 61, 64, 81, 94, 97, 99, 107, 153, 170, 185, 190, 204) に出現する。<sup>[2]</sup>

たとえば、継子は残り物のカチカチのパン (KHM 13) やパン皮 (KHM 11) しか継母から与えられない。継子はパンと水だけ持って旅に出る (KHM 25)。一二人の子を持つ父親は毎日懸命に働いてもパン一つしか子どもにも与えられない (KHM 44)。妻は夫にバターもチーズもない固いパンだけ渡す (KHM 59)。妻は浮気相手にはご馳走を出す、夫にはチーズとパンしか出さない (KHM 61)。粗末な食事とは灰だらけのパンケーキとすっぱいビール (KHM 64) または、軍用パンと水だけ (KHM

【表】頻出度が高い飲食物の順位表 (出現話数)

番号	飲食品名	ドイツ語	話数
①	パン	Brot	六三
②	水	Wasser	三六
③	ワイン	Wein	三五
④	肉	Fleisch	二三
⑤	林檎	Apfel	一七
⑥	ミルク	Milch	一三
⑦	ライ麦	Korn (Roggen)	一一
⑧	鶯鳥	Gans	八
⑨	ケーキ	Kuchen	一〇
⑩	ビール	Bier	一〇
⑪	キャベツ	Kraut, Kohl	九
⑫	鹿	Hirsch, Rehe	八
⑬	塩	Salz	八
⑭	鶏	Hahn, Huhn, Henne	七
⑮	魚	Fisch	七
⑯	スープ	Suppe	七
⑰	粥	Brei	七
⑱	ナッツ	Nuss	七
⑲	果物	Obst	七
⑳	ソーセイジ	Wurst	六
㉑	チーズ	Käse	六
㉒	蜂蜜	Honig	六
㉓	エンドウ豆	Erbsen	六
㉔	野菜	Gemüse	六
㉕	兎	Hase, Kaninchen	六
㉖	砂糖	Zucker	五
㉗	黍	Hirse	五

㉘	卵	Ei	五
㉙	小麦	Weizen	五
㉚	木の实	Beer	五
㉛	蕪	Rübe	四
㉜	バター	Butter	四
㉝	洋ナシ	Birne	四
㉞	ジャガイモ	Kartoffeln	四
㉟	カラス麦	Hafer	四
㊱	羊	Lamm	三
㊲	猪	Wildschwein	三
㊳	大麦	Gerste	二
㊴	穀物	Getreide	二
㊵	鴨	Eute	一

81) の食事のことを指す。

二番目に多いのは「生活費という意味のパン」で、「日々のパンにも困る」という表現で一〇話 (KHM 3, 15, 44, 87, 99, 110, 130, 142, 180, 205) に出現する。

たとえば、樵の「夫婦は貧しくて、その日のパンにも困るはだった」(KHM 3)。貧乏な弟は穀物の商いがうまくいかず、「妻や子どもたちに食べさせるパンが手に入らない」(KHM 142)。貧しい樵は「ぐくぐく稼いでも、その日のパンに消えてしまふ」という表現で、パンを「食糧」一般を指す言葉として使っている (KHM 99)。

三番目に多いのは、「自立する(生活費を稼ぐ)」という意味のパン」で、「パンを食べたかったら働け」という表現が九話

(KHM 3, 4, 16, 21, 27, 90, 147, 183, 188) に出現する。

たとえば、父親は息子に「パン代を稼ぐために何か学んでこい」と言って世間に送り出す (KHM 4)。継母は灰かぶりに「パンを食べたかったら働け」と命じる (KHM 21)。祖母は十五歳の孫娘を臨終の床に呼んで「紡錘と杵と針を残しておくから、それでパンを稼げ」と言う (KHM 188)。「パンを稼ぐ」とは「自立すること」を意味し、それを成し遂げた子は、パンだけでなく幸運も手に入れる。

四番目に多いのは「食事を意味するパン」で、七話に出現する。たとえば、夕食 (Abendbrot) は四話 (KHM 5, 29, 83, 93) に、昼食 (Mittagsbrot) は一話 (KHM 169) に、食事一般 (Brot) は二話 (KHM 84, 195) に出現する。

五番目に多いのは「施しを意味する語としてのパン」で、五話 (KHM 48, 198, 201, 205, 206) に出現する。たとえば、老犬ズルタンに施しのパンを与えたり (KHM 48)、城に監禁されたマレーン姫にパンを施す人がいなかったり (KHM 198)、娘がパンとパンケーキで作ったパン粥を聖ヨゼフに施したり (KHM 201)、貧乏な妹一家が金持ちの姉一家にパンの施しを求めたり (KHM 205)、托鉢僧が戸口でパンの施しを求めたり (KHM 206) する。

六番目に多いのは「贅沢な食事として出現するパン」で、三話 (KHM 65, 84, 123) に出現する。たとえば、白パンは贅沢な水である。治癒の話は、たとえば、名付け親である死神がくれた水を病人に飲ませると、病気が治癒する (KHM 42)。ただし、死神が足元に立っているときは効力がない。死神と視線が合うからである。死神は視線を合わせることで病人の魂を黄泉の国に連れ去るのである。胡桃を喉に詰まらせた牝鶏を助けるのに必要な水を、雄鶏が入手できず、牝鶏は死んでしまう (KHM 80)。この話では水の有無が生死を左右する。命の蘇生の話は、たとえば、蛇に変身させられた姫を救済するため、若者は黒い男たちの暴行を受けて殺されてしまう。しかし、夜中の一二時を過ぎると、姫が来て命の水で若者を蘇らせ、自らも蛇の姿から人間の姿に戻ることができる (KHM 92)。三男の王子は艱難辛苦を経て命の水を入手する。小人に傲慢な態度を取らず、助言を求めて相談したからである (KHM 97)。自分の力を過信する賢い兄たちではなく、馬鹿な三男が入手できたのは、彼が傲慢ではなく謙虚であったからだ。傲慢 (superbia) は「七つの大罪」(Sieben Todsünden) のなかで、一番重い罪とされている<sup>(5)</sup>。魔法にかけられた城の中庭にある井戸の水が命の水である。番犬を鉄の鞭とパンで手なづけ、一二時までに汲むと、入手することができる。しかし、その前に、王子は悪魔のリンチに耐えねばならない (KHM 121)。

二番目に多いのが「最低限の食事としての水」で四話 (KHM 25, 94, 170, 185) に出現する。監獄の囚人にパンと共に与えら

食事の典型で、ミルク、肉、ワインと共に食される (KHM 84, 123)。結婚相手の財産を推測するときも、ミルクに入れる白パンがどれだけあるかが判断の基準になる (KHM 84)。森の中で娘を助けた木の精が毎日運んでくるご馳走も白パンとミルクである (KHM 123)。また、パンスープも贅沢な食事で、王に提供する夜食として出現する (KHM 65)。そのパンは黒パンか白パンか明記されていないが、通常、昔のドイツではパンというとき、黒パンを指す。白パンの場合は白パンと明記されるからである。王族がパン粥を食べていた実例として、一九世紀初期にドロステ・ヒュルスホフの実家の城では、朝食に温めたビールやパン粥 (ブーパーニッケルという黒パンをスープでふやかして溶かし脂をいれたもの) を食べていたという記録がある<sup>(6)</sup>。

七番目に多いのは「墓への供物としてのパン」で、一話 (KHM 16) に出現する。たとえば、夫婦の一人が先に死んだら、相手も一緒に死ぬという約束をした王は、后が死んだので、自ら王家の墓に入る。柩の傍らには、大きな丸パンが四つとワインの瓶が四本置かれている。

## (2) ②位 水 (Wasser) 三六話

一番多いのは「病気を治癒し、命を蘇らせる水」で九話に出現する。そのうち治癒に重点を当てた話は六話 (42, 80, 81, 92, 97, 121) で、「命の蘇生に重点を当てた話は三話 (92, 97, 121) で

れる水である。

三番目に多いのが「人を動物に変身させる水」で一話 (KHM 11) に出現する。「兄と妹」では水は変身させる力を保持している。妹が止めるのにもかかわらず、泉の水を飲む兄は、鹿に変身してしまう (KHM 11)。

## (3) ③位 ワイン (Wein) 二五話

一番多いのは「豪華な食事としてのワイン」で七話 (60, 61, 85, 90, 93, 127, 143) に出現する。たとえば、父親は兄たちにはワインを持たせるのに、三男の抜けた作には酸っぱいビールしか持たせない (KHM 64)。継母は実子にはワインを飲ませるが、継子には水しか飲ませない (KHM 13)。ようするに、ワインは水よりもビールよりも、上等な飲み物だったのである。

二番目に多いのは「睡眠薬としてのワイン」で、五話 (KHM 40, 133, 166, 192, 193) に出現する。たとえば、兵隊を眠らそうと姫はワインを持参する。しかし兵隊は、老婆に忠告されていたので、ワインを飲まない。そして、姫たちの後を付けていく。彼は「二人の姫たちは地底の国で王子たちと踊っていた」と王に報告し、褒美として姫との結婚が許される (KHM 133)。ワインに飲まれず、ワイン欲を制御することができる人間が、成功するのである。古いハンガリーワインに睡眠薬が入っていたので、泥棒名人は城の兵隊たちを眠らせ、難なく目的を達成

することができる (KHM 192)。花婿が寝る前に飲むワインに花嫁が眠り薬を入れたので、寝室のドアの前で娘が綿々と身の世話をするのを、花婿は聞くことができず (KHM 193)。ワインを飲みたいという欲望を花婿が制御し、眠らずにいると娘の話が聞こえてきて、自分がその娘と婚約していたことを思い出す。

三番目に多いのは「薬としてのワイン」で三話 (KHM 6, 26, 53) に出現する。たとえば、美女の絵を見て卒倒した王子に、忠臣ヨハネスはワインを飲ませて意識を回復させる (KHM 6)。赤頭巾がワインを飲ませると、気絶した祖母は正気を取り戻す (KHM 26)。倒れている白雪姫の体を小人はワインでこする (KHM 53)。ここではワインは気付け薬として使われている。

同じく三番目に多いのは「人を陽気にさせるワイン」で三話 (KHM 28, 36, 77) に出現する。ワインを飲むと、人は陽気になって踊り出す (KHM 28)。肉料理に赤ワインが添えてあると、嬉しくてワクワクする (KHM 36)。女中のグレーテルはワインを飲むと何か食べたくなり、自分が料理した客用の鶏の丸焼きを二羽ともひとりだけで食べてしまう。そして、やって来た客には指を口に当てて「シィ、静かに、直ぐお逃げなさい。[...]」うちの主人はあなたを夕食に招待したのではなく、本当は、あなたの両耳を食べるために招待したんです。スパッと切れるよう、目下、包丁を磨いでいます。ほら、聞こえるでしょう」と

言って追い返す。一方、主人には「客は鶏を二羽とも皿から取って、持ち逃げしました」と報告する (KHM 77)。陽気になってつまみ食いし、そのうえ、上手に嘘をつく能力までワインが授けてくれたのであろうか。

その他ワインは、人を殺す道具にされることもある。盗賊と知らずに、求婚された相手の家に娘が行くと、老婆が樽の後ろに隠してくれる。盗賊は別の娘を連れてきて、三つのグラスに白と赤と黄色の三種類のワインを注ぎ、娘に飲ませる。すると、娘は心臓が張り裂けてしまう。その後、盗賊たちは娘の体を細切れにして、塩を振りかけて食べる (KHM 40)。

また、豪華な食事につきもののワインは、同時に宗教的儀式や墓場や柩に添えるものでもある。洗礼式には赤ワインが使われ (KHM 2)、王家の墓では、四つのパンと四本のワインが備えられている (KHM 16)。

さらに、ワインは森で鉱夫として働く小人の飲み物でもあり (KHM 53)、貧しい徒弟職人の飲み物でもある (KHM 81)。つまり、ワインは上層階層だけでなく、下層階層の人々も好んで飲む国民的飲み物だったのである。

#### (4) ④肉 (Fleisch) 二三話

一番多く出現するのは牛肉で五話 (KHM 7, 45, 61, 83, 111) に出現する。たとえば、農夫が牝牛をつぶして、その肉を市に売

りに行くとき、肉屋の犬が「ちょっと、ちょっと (was, was)」と肉を要求するので、肉を投げてやる。翌日、農夫は肉屋に肉の代金を要求するが、相手にされず (KHM 7)。牛に喰われてしまった親指小僧は胃の中からここにいと大声で叫ぶが聞こえず、ミンチ肉と一緒にソーセージに詰められてしまう (KHM 45)。貧乏な百姓は牝牛をつぶして肉を塩漬けにし、皮を市場に売りに行く (KHM 61)。ハンスは汁気のない牛肉より、旨味のある豚肉の方が好きだという (KHM 83)。三人の大男が牝牛を串にさして丸焼きにしてやる (KHM 111)。

二番目は豚肉で四話 (KHM 28, 83, 108, 118) に出現する。たとえば、ハンスは乳の出ない牝牛を子豚と交換して、牛肉より豚肉の方が美味しくて、ソーセージも作れるという (KHM 83)。つぶした豚から心臓を取り出し、女中が棚に入れておく (KHM 118)。その心臓を軍医が人にはめ込むと、その人は豚のように餌をぶんぶん嗅ぎ回る。

同じく二番目は人間の肉で四話 (KHM 15, 40, 47, 51) に出現する。たとえば、魔女はヘンゼルを檻に入れて、充分な餌を与えて、太らせてから食べると言う (KHM 15)。森の中の花婿の家に花嫁が行くと、老婆が出てきて、連中はお前を「ぶつ切りにして、グツグツ煮て、食べてしまおう」と言う (KHM 40)。継息子を殺した継母は、息子をぶつ切りにして鍋に入れ、酢で煮込む。それを父親は息子の肉とは知らず、美味しいと言って、

全部平らげる (KHM 47)。賄のザンネ婆さんは、明日の朝、拾い子の「みつけ鳥」を鍋にぶち込んで煮込むと、実の娘のレンヒェンに言う (KHM 51)。

四番目は猪肉で三話 (KHM 45, 166, 183) に出現する。たとえば、ハンスが城に運び込んだ猪をみんなで串にさして、丸焼きにして食べる (KHM 166)。大男は仕立屋に夕食用に猪を二頭仕留めるよう命じる (KHM 183)。

五番目に出現するのは羊肉 (KHM 81) と馬肉 (KHM 22) で、各一話ずつである。ひょうきん者は仔羊をつぶして、鍋に入れて煮て、一番おいしい心臓をつまみ食いしてしまう。聖ペテロが心臓を要求すると、彼は仔羊には元々心臓がなかったと言張る (KHM 81)。魔女の毒を浴びて死んだ馬の肉を鴉が啄ばみ、その鴉を持参して宿屋のおやじに料理するよう依頼する。すると、それを食べた人々は全員その毒で死んでしまう (KHM 22)。

この他に、具体的に肉の種類の記事がなく、ただ肉とのみ表示されているものが九話存在する。

#### (5) ⑤位 林檎 (Apfel) 一七話

一番多いのは黄金の林檎で五話 (KHM 17, 57, 130, 136, 165) に出現する。たとえば、姫は命の木になる黄金の林檎を持参することが、婿になる条件だと言う (KHM 17)。姫が騎士たちの真ん中に投げた黄金の林檎を、美しい装束の騎士がつかみ取

る。彼は姫と結婚することになる (KHM 136)。黄金の林檎を持つ王は、それを啄ばむ黄金の鳥を欲しがり、息子たちに確保しよう命じる。三男がそれを確保し、黄金の城の姫と結婚する (KHM 57)。黄金の林檎が実る木を所有する平民の娘は、騎士に見初められ、花嫁として迎えられる (KHM 130)。三男のハンスが持参した黄金の林檎を食べると、姫の病氣は治り、ハンスは姫と結婚する。ようするに、黄金の林檎は、身分を越えた相手との「幸せな結婚」をもたらすものなのである。

二番目は命をもたらす林檎で、三話 (KHM 17, 121, 165) に出現する。たとえば、命の木は庭の真ん中にあり、赤い林檎が実っている。王子が林檎をもぐと、とてつもない力が体中に漲る (KHM 121)。命の木になる林檎は黄金の林檎で、海を越えた世界の果てに生えている。それを子鳩からもらった若者は姫に渡す。すると、姫の心は若者への愛しさで一杯になり、二人は結婚する (KHM 17)。ハンスが持参した黄金の林檎を食べるや否や病氣だった姫は元氣になり、寢床から飛び起きる (KHM 165)。三番目は人を殺す力を持つ林檎で二話 (KHM 47, 53) に出現する。たとえば、長持ちのなかの林檎がおいしそうなので危険を顧みず首を突っ込むと、継母が蓋を下ろし、息子は首がとれて死んでしまう (KHM 47)。継母は白雪姫が生きていることを知り、自ら毒林檎を作って持参し、姫を殺してしまふ (KHM 53)。毒として出現する林檎は、「白雪姫」のみで、王妃が毒を入

一方、貧乏人が神をもてなす食事はジャガイモと山羊乳 (KHM 87) という慎ましいものである。また、ものぐさハイキングが二頭しか持っていない家畜は山羊 (KHM 164) である。このことから、山羊乳は貧乏人の乳とされていることがわかる。実際、現在でも、山羊は主に開発途上国の人々に乳と肉を提供し、いわゆる「貧しい人々の牛」として飼育されている<sup>(9)</sup>。山羊乳は臭いと言われているが、乳には不快な臭いはない。周辺の臭いを吸着する性質が強く、山羊の体臭や舎内の糞尿臭を吸着するためである。一九五二年には、山羊乳は牛乳より栄養的に優れているという実験結果が報告されている<sup>(10)</sup>。山羊乳は牛乳よりタウリン含有量が五〇パーセントも多く、人乳とほぼ同じである。タウリンは新生児の発育や脳の発達、栄養失調やストレス解消に不可欠な成分である。幼児や老人は生体内のタウリン合成能力が劣っているので、食事として摂取する必要がある<sup>(12)</sup>。グリム童話で貧乏人の乳とされている山羊乳は、現在ではその摂取が栄養学の面から推奨されているのである。

### (7) ⑩位 ビール (Beer) 一〇話

現在ではドイツはビールで有名な国だが、グリム童話では、水やワインに比べて頻出度が低い飲み物である。一体、なぜなのだろう。

グリム童話ではビールは「酸っぱいビール」といわれ、馬鹿

れて人為的に作ったものであり、自然に実っている林檎が有毒であるわけではない。

ギリシア神話ではヘスペリデスたちの守る黄金の林檎は不老不死の果実である<sup>(6)</sup>。北欧神話では青春の女神イドゥンの林檎は「それを食べたものを若返らせる力」を持っている<sup>(7)</sup>。さらに、グリム兄弟のドイツ語辞典では「文学や詩歌では林檎は女性の乳房」と表現されている<sup>(8)</sup>。

実際、林檎にはビタミンやカリウム、食物繊維、ポリフェノールなどが含まれており、健康や美容効果が期待できる成分が数多く入っている。若返らせる能力が「不老不死」の黄金の果実という表現でメルヒェンに出現しているのであろう。

### (6) ⑥位 ミルク (Milch) 一三話

ミルクは牛と山羊の二種類が出現するが、牛乳が一〇話 (KHM 3, 13, 15, 37, 38, 83, 84, 104, 123, 168) に、山羊乳が三話 (KHM 36, 87, 164) に出現する。白パンを入れる乳は必ず牛乳 (KHM 38, 84) で、馳走と見なされている。また、砂糖をまぶしたパンと一緒に飲むのも牛乳 (KHM 3) である。たとえば、木の精が娘に与えるご馳走は白パンと牛乳 (KHM 123) であり、天国でマリアが子どもに与えるのもお菓子と牛乳 (KHM 3) である。ようするに、牛乳は高級な乳と見なされていたのである。

者や労働者の飲み物として出現する。

一番多いのは、馬鹿者や貧乏人の飲み物としての出現で五話 (KHM 34, 59, 64, 81, 83) に出現する。たとえば、貧しい家庭の賢い(＝馬鹿な)娘エルゼが地下で妄想を広げる飲み物である (KHM 34)。馬鹿な妻が地下にビールを汲みに行き、栓をするのを忘れて、あわてて上等の小麦を撒いてしまふ (KHM 59)。抜け作の三男に持たすのは、灰で焼いたケーキと酸っぱいビールである (KHM 64)。また、馬鹿でおめでたいハンスの飲み物でもある (KHM 83)。解雇された貧乏な兵士が軍用黒パン (Kornbrot) と一緒に一クロイツァーで注文するものである (KHM 81)。その彼が大金を入手したとき、三クロイツァーで注文するのはワインである。

二番目に多いのは人間以外のものが飲む飲み物としての出現で、三話 (KHM 10, 30, 36) に出現する。たとえば、縫い針がビールを飲む (KHM 10)。また、鼠が卵の殻で作った器でビールを飲む (KHM 30)。さらに、女中の猫がビールを温めてバターを入れて客の狐に提供する (KHM 38)。興味深いのは典型的なバイエルンの農夫の飲み物として出現することである。金持ちは三つの願いを考えるのに苦労して言う。「まったく、あのバイエルンの農夫がうらやましいよ。あいつにも三つの願いが許されたけど、自分の欲しいものはちゃんと知っていた。一つ目はしこたまビールが欲しい。二つ目は飲めるだけのビー

ルが欲しい。三つ目はもう一樽ビールが欲しいだったんだ。」  
(KHM 87)。

パスツールが低温殺菌法を発見する一八六六年以前は、すべてのビールが酸っぱい味をしていたという。乳酸菌やバクテリアなどのビールに特別な酸味をもたらす酵母の感染を防ぐことができなかったからだ。それゆえ、「酸っぱいビールは売れる」という言葉が残っているのである。一九世紀末にビールメーカーがこれを防ぐようになるまで、実際に「酸っぱいビール」は存在した。それゆえ、人々は好んでワインを飲み、ビールは格下の飲み物とされてきたのである。ビールは主として、農民、兵隊、労働者などの貧しい人々の飲み物であった。

ドイツではビールは水より安いと言われるくらい、一般に普及している。一缶一ユーロ(約一六〇円)前後のビールもあるし、二ユーロする水もある。そのため、ビールが安く、水が高く感じられるのであろう。

(8) ⑬位 キャベツ (Kraut, Kohl) 九話

キャベツは畑にある柔らかい野菜として出現する (KHM 122) だけでなく、葉草として出現したり (KHM 44)、人を驢馬に変身させる魔力を持つ野菜として出現したり (KHM 122) する。ようするに、キャベツは野菜としてだけでなく、葉草としても摂取されていたのだ。

いつ頃からドイツに存在するのか具体的な時期は不明だが、少なくとも一七世紀には存在していた。なぜなら、一六〇七年にフランス人ジャン・アントワーン・ユゲタン (Jean-Antoine Huegan) がその著書『健康の宝』(Le Trésor de Santé) で「ザワークラウト」は「ドイツ料理」であると明記しているからである。<sup>(21)</sup>バルト海沿岸諸国の貧しい農民はザウアークラウトと鯀で栄養を取り、飢餓から免れたそうである。<sup>(22)</sup>

(9) ⑳位 ソーセージ (Wurst) 六話

焼いたり、茹でたりして食べるものだが、グリム童話では主として焼きソーセージとして出現する。ソーセージを煙突からはずして、バターを入れてフライパンで炒めて食べたり (KHM 59)、ビールと一緒に食べるものとして出現したりする (KHM 59)。ソーセージは豚を屠殺すると出現するくず肉や血などを無駄なく利用しようという意図から生まれたものだ。それらを腸などの内臓に詰める際、殺菌のため多めの塩と香辛料を入れて、煙突の中に吊り下げて燻して作られる。食べる際には水に浸して必ず塩抜きしなければならない。生の原料を加熱せず作る「ローヴルスト」、加熱済み材料で作る「コッホヴルスト」、ケーシングに詰めてから加熱する「リュウヴルスト」の三種類が存在する。<sup>(23)</sup>

ソーセージは高価なステーキ肉には手が出ない、貧しい人々

実際、キャベツに含まれる食物繊維は便秘の改善、腸内環境を整えて大腸癌、糖尿病の予防、肥満の改善などさまざまな疾患の予防や改善に効果があるだけでなく、痛風や神経などの痛みを和らげることができるという。<sup>(14)</sup>

キャベツは「古代ギリシアの女性には産後の魔除けとして、古代ローマ人には万能薬として食されていた」という。キャベツにはカルシウムやミネラルなどの栄養素があり、癌予防の効果もある<sup>(16)</sup>。また、葉と種子は避妊薬や堕胎薬としても使用されていた。<sup>(17)</sup>子どもを産むのを避ける力を持つキャベツは、人の命を絶ち、動物に変身させる力も保持するとみなされたのだから。キャベツを食べた人間が驢馬に、驢馬が人間に戻るの (KHM 122)、人命を左右する力をキャベツが保持すると信じられていたからではないだろうか。

一三世紀から一八世紀にかけてヨーロッパでは、小作人など貧しい農民たちのあいだで非課税対象であったキャベツを含む野菜が重宝され、穀物畑の空き地や農民の自家菜園で栽培されていた。それゆえ、キャベツは貧者の食べ物と位置づけられていたのだ。<sup>(18)</sup>キャベツはアスパラガス、玉葱、人参に継ぐ代表的なドイツの野菜であるだけでなく、ピクルス、すなわち、「ザワークラウト」として輸出されてきた。<sup>(19)</sup>

ソーセージの付け合わせとして食されるザウアークラウトは典型的なドイツ料理で、奇跡の治癒力を持つといわれている。<sup>(20)</sup>

の食べ物であった。グリム童話では狼の好物としても出現し、ベーコンと一緒に狼に喰われてしまう (KHM 37)。

(10) ㉔位 ジャガイモ (Kartoffel) 四話

総じて粗末な食事として出現している。親指小僧は親方の家の食事を「ジャガイモばかりで肉少し」と酷評する台詞を吐く。立派な服を着た客人が、貧しい農家の日常食であるジャガイモ団子 (KartoffelkloÙe) が食べたいと要求する。後に、その客人は実の息子であることが判明する (KHM 192)。ジャガイモ団子は、いわゆる「おふくろの味」としてドイツ人に親しまれていた食べ物であった。炭焼きの貧しい食事として出現するのは、必ず塩ゆでのジャガイモだ (KHM 54)。ようするに、ジャガイモはパンを食べられないほど貧乏な人が食べる食材として登場しているのである。

一六世紀にスペイン人が南米から持ち帰った当初は、ジャガイモはドイツではあまり普及しなかった。食の歴史研究者トイテベルク教授 (Hans Jürgen Teuteberg, 一九二九—二〇一五) によると、ジャガイモは一七世紀から一八世紀にかけて、まず、プファルツ地方とフォークトランド地方 (山岳の僻地) に限定されて導入されたという。<sup>(24)</sup>当初は、地下で育つ奇妙なものとして農民は不信感を抱いていたが、一八世紀末には下層階層に普及していく。プロイセンのフリードリッヒ二世 (一七四〇—一

七八六)が飢饉を救うため、一七四六年南ボンメルン地方でジャガイモ普及令を發布したことが理由と言われるが、最大の要因は食糧不足である。一八世紀は人口増と寒冷化現象で穀物生産が壊滅的な打撃を受けた。ジャガイモはその影響を免れたので生産が拡大していった。また、啓蒙主義者たちがジャガイモに対する民衆の偏見を取り除いたことも一因といえる。<sup>(26)</sup>

ルドルフ・ツアハリアス・ベッカー(一七五二—一八二二)が『農民のための生活の手引き』(一七八八)という本で様々なジャガイモの食べ方を紹介したのだ。上からの命令より、民衆に近い各地の知識人の影響の方が大きいのではないかとトイテベルク教授は主張する。<sup>(28)</sup>

一九世紀末にはドイツは世界最大のジャガイモ生産国になった。貧民食というイメージがあったジャガイモは、一九世紀末になると次第にそのイメージが払拭され、市民層にも普及していく。そして、一九世紀末にはジャガイモは日常食だけでなく、祝祭時の豪華な食事にも登場するようになり、ドイツの「国民食」として認められるようになる。<sup>(30)</sup>

グリム童話が収集されたのは一九世紀前半(一八一〇—一八五七)であるので、ジャガイモはまだ国民食ではなく、貧民食という位置づけになっていた頃である。

一方、現在ではジャガイモといえばドイツが有名であるかのように思われているが、二〇二一年の統計によると、ジャガイモの年産量は中国が最も多く、ドイツは二番目に多い。年産量が最も多いのは中国で、その量はドイツの約十倍に達している。年産量が最も少ないのはオーストラリアで、その量はドイツの約五分の一に達している。年産量が最も少ないのはオーストラリアで、その量はドイツの約五分の一に達している。年産量が最も少ないのはオーストラリアで、その量はドイツの約五分の一に達している。

たとえば、家の前で鶏の丸焼きを食べようとしていた夫婦は、自分の年老いた父親がやってくるのを見ると、大急ぎで丸焼きを隠す。「父親には一口だってやりたくなかったからだ」(KHM 145)。同様に、年取った父親を毛嫌いして、部屋隅に追いやり、腹いっぱい食べさせない夫婦も登場する(KHM 78)。孫に指摘され、明日は我が身ということがわかって、初めて待遇を改善する。さらに、主人やその客は鶏の丸焼きという馳走にありつけるが、その料理を作った使用人(女中)がご馳走にありつけることは稀だ。それゆえ、「賢いグレーテル」は一計を巡らせて、招待客を追い払い、鶏の丸焼きを独り占めする(KHM 77)。メルヒェンならではのユーモアであると同時に、貧しい民のささやかな願望が語られている。

### 3. 結婚相手に求められる条件

平民層では娘の結婚相手は、豊かな人であることが望まれる。具体的には、牛乳に入れる白パンを豊富に持っている男性が裕福と見なされて選ばれる(KHM 84)。一方、息子の結婚相手は、チーズの皮を上手に剥ける娘が選ばれる(KHM 155)。食料品を無駄にしないことが、良い嫁の条件となっているのだ。さらに、ものを大切にし、無駄にしないことも女性に求められる条件である。それゆえ、美人だが怠け者で亜麻糸の塊を捨て

モの世界生産量でドイツ(人口〇、八億人)が占める割合は三パーセントにすぎず、世界で六位の生産国にすぎない。一位は中国(二四、四億人)で二五パーセント、二位はインド(一三、九億人)で一四パーセント、三位はウクライナ(〇、四億人)で五、七パーセント、四位はアメリカ(三、三億人)で四、九八パーセント、五位はロシア(二、四億人)で四、八パーセントである。しかし、一人当たりのジャガイモ消費量で見ると、一位はウクライナ、二位はドイツになる。ドイツが世界一位の収穫量を誇ったのは、一八八五年から一九一四年頃であった。<sup>(32)</sup>

### 2. 普段の食事とハレの日の食事

平民の普段の食事は黒パンとチーズ、飲み物はワインか水かミルクだ。非常に貧乏な人々は黒パンとビールまたは水のみが食事だ。ハレの日の食事は、グリム童話のなかでは白パン、焼肉、野菜、スイーツ(ケーキなど)であり、王様のような食事と表現されている。王侯貴族ではなく、平民がハレの日のような食事をするのは、夫の留守に浮気相手の牧師と食事をするときである。旅の予定を変えて急に帰ってきた夫には、妻はパンとチーズしか提供しない。不倫相手にはご馳走を出し、夫には貧しい食事しか出さないと、妻のしたたかさと同時に、夫に対する鬱憤が見て取れる(KHM 95)。

ハレの日の食事、ご馳走にありつけない人間もまた存在せず、てしまうようなお嬢様ではなく、捨てられた亜麻糸を紡いで服にする女中が人生の伴侶として選ばれるのである(KHM 156)。平民にとって結婚の条件は、相手の容姿や身分ではなく、家族の食料を無駄にせず増やし、衣服の調達に長けた人であることだ。これは平民だけでなく、王家にもあてはまる。

たとえば、たとえ出自が粉ひきであっても、薬を金に紡ぐ娘は、王の嫁にと請われる(KHM 55)。同様に、金の林檎を所有する農家の娘は、貴族の息子に求婚される(KHM 130)。金の靴(KHM 21)や金の髪の毛(KHM 65)や金の薬(KHM 55)を持つ娘にだけでなく、実際に、遺産相続で金持ちになった娘に求婚者が殺到し、王子まで娘に求婚する(KHM 186)。ようにするに、王家にも財産を増やすための結婚が求められたのである。

### 結論

飲食物に焦点を当てて見ていくと、グリム童話は昔の民の日常の生活を語っているように思われる。黒パンと水、またはワインで生活する貧しい人々は、チーズとミルクで栄養を補い、鶏の丸焼きや牛肉などはハレの日の食事であることがわかる。黒パンはライ麦で作られ多くの栄養素を含むので、精製した小麦で作る白パンよりはるかに栄養価が高い。しかし、玄米と白米と同じように、原ライ麦で作る黒パンは日常食であり、ハレの日のご馳走ではない。ミルクに入れる白パンの有無が財産

の有無につながるように、昔の人々にとっては財産とは高価な食糧を多く所持することであった。

食べ物に焦点を当ててグリム童話を読んでいくと、飢饉が来て、日々のパンにも事欠く多くの貧しい人々の姿が、すなわち現実がユーモアを込めて語られているように思われる。一方、非現実が語られているのは、神が貧乏人に手を差し伸べてくれることだ。食糧難で飢餓に直面していた貧しい人々にとって、神の恵みは、メルヘンというフィクションで夢見るしかなかったであろう。

【資料1】 出現するKHM番号の題名

- KHM 2 「猫と鼠の共暮らし」
- KHM 3 「マリヤの子」
- KHM 4 「怖がることを学びに修行に出た男」
- KHM 5 「狼と七匹の子山羊」
- KHM 6 「忠臣ヨハネス」
- KHM 7 「うまい取引」
- KHM 10 「ろくでもない連中」
- KHM 11 「兄と妹」
- KHM 13 「森の中の三人の小人」
- KHM 15 「ハンゼルとグレーテル」
- KHM 16 「三枚の蛇の葉」
- KHM 17 「白い蛇」
- KHM 20 「勇敢なちびの仕立て屋」
- KHM 21 「灰かぶり」
- KHM 22 「謎」
- KHM 25 「七羽のカラス」
- KHM 26 「赤ずきん」
- KHM 27 「ブレーメンの音楽隊」
- KHM 28 「歌う骨」
- KHM 29 「金の毛が三本ある悪魔」
- KHM 30 「鼠と蚤」
- KHM 34 「賢いエルゼ」
- KHM 36 「テンプルゴはんだ、金ひり驢馬、棍棒出てこら」
- KHM 37 「親指小僧」
- KHM 38 「奥様キンネの婚礼」
- KHM 40 「盗賊の花婿」
- KHM 42 「名付け親」
- KHM 44 「死神の名付け親」
- KHM 45 「親指小僧の旅修行」
- KHM 47 「杜松の木」
- KHM 48 「老犬ズルトン」
- KHM 51 「みづけ鳥」
- KHM 53 「白雪姫」

- KHM 54 「背囊と帽子と角笛」
- KHM 55 「ルンペルシュテュルツヘン」
- KHM 57 「黄金の鳥」
- KHM 59 「フリーダーとカーターリースヘン」
- KHM 60 「二人兄弟」
- KHM 61 「水飲み百姓」
- KHM 64 「金の鷲鳥」
- KHM 65 「千枚皮」
- KHM 77 「賢いグレーテル」
- KHM 78 「年とった爺さんと孫」
- KHM 80 「牝鶏ちゃん死」
- KHM 81 「ひょうきん者」
- KHM 83 「幸運なハンス」
- KHM 84 「嫁取りハンス」
- KHM 85 「黄金の子ども」
- KHM 87 「貧乏人と金持ち」
- KHM 90 「若い巨人」
- KHM 92 「黄金の山の王様」
- KHM 93 「カラス」
- KHM 94 「賢い百姓娘」
- KHM 95 「ビルデブラントじじやん」
- KHM 97 「命の水」
- KHM 99 「ガラス瓶の中の魔物」
- KHM 104 「かしこい人たち」
- KHM 107 「二人の旅職人」
- KHM 108 「ハンス坊や針鼠」
- KHM 110 「茨の中のユダヤ人」
- KHM 111 「腕利きの狩人」
- KHM 118 「三人の軍医」
- KHM 121 「怖いもの知らずの王子」
- KHM 122 「キャンツ驢馬」
- KHM 123 「森の中の老婆」
- KHM 127 「鉄の暖炉」
- KHM 130 「一ひ目、二ひ目、三ひ目」
- KHM 133 「踊ってすり切れた靴」
- KHM 136 「鉄のハンス」
- KHM 142 「シメリ山」
- KHM 143 「旅に出る」
- KHM 145 「親不孝な息子」
- KHM 147 「火に焼かれて若返った男」
- KHM 153 「星の銀貨」
- KHM 155 「嫁選び」
- KHM 156 「糸くず」
- KHM 164 「ものぐさハイマン」

- KHM 165 「グライフ鳥」  
 KHM 166 「怪力ハンス」  
 KHM 168 「やせのリーゼ」  
 KHM 169 「森の家」  
 KHM 170 「苦菜をわかつ」  
 KHM 180 「エバの不揃いな子どもたち」  
 KHM 183 「巨人と仕立て屋」  
 KHM 185 「墓の中のかわいそうな少年」  
 KHM 186 「ほんとうの花嫁」  
 KHM 188 「錘と杵と針」  
 KHM 190 「テーブルの上のパンくず」  
 KHM 192 「泥棒名人」  
 KHM 193 「太鼓たたき」  
 KHM 195 「墓の盛り土」  
 KHM 198 「マレーン姫」  
 KHM 201 「森の聖ヨゼフ」  
 KHM 204 「貧しさと慎ましきは天国にいたる」  
 KHM 205 「神さまの食事」  
 KHM 206 「二本の緑の枝」

注

- (1) グリム童話の正式名である。第七版が決定版である。

- (10) 同。  
 (11) 同、八〇頁。  
 (12) 同、八二頁。  
 (13) 【ボールの歴史】パストゥールによる「低温殺菌法」の発明。 <https://www.craftbeer-fanclub.com/pasteurization/> 閲覧日 二〇二三年一〇月七日。  
 (14) 田中孝治『図解 薬草の実用事典』家の光協会、二〇〇一年、六四頁。  
 (15) メグ・マッケンハウプト著、角敦子訳『キャベツと白菜の歴史』原書房、二〇一九年、四一頁。  
 (16) 同、六八―六九頁。  
 (17) 同、六九頁。  
 (18) 同、一〇六―一一一頁。  
 (19) 森嶋輝也「ドイツにおける野菜の需給構造と生産者組織」農研機構九州沖縄農業研究センター編『九州沖縄農研農業経営研究資料』二〇一四年、一四頁。  
 (20) メグ・マッケンハウプト著、前掲、八三頁。  
 (21) 同、九二頁。  
 (22) 同、八六頁。  
 (23) デイリー・アレン著、伊藤絢訳『ソーセージの歴史』原書房、二〇一六年、六六―七三頁。  
 (24) アンドルー・F・スミス著、竹田円訳『ジャガイモの歴

*Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 7. Auflage. Berlin 1857. 略称: KHM*

- (2) KHM 番号のメルヘン名に関しては【資料1】を参照。  
 (3) 南直人『世界の食文化』⑧ ドイツ』農山漁村文化協会、二〇〇三年、九七頁。  
 (4) 池上俊一『歴史としての身体』柏書房、一九九二年、九六頁。  
 (5) 六世紀後半にグレゴリウス一世が『モラリア』（ヨブ記の注釈）で七つの大罪を罪が重い順に①傲慢（*superbia*）<sup>1</sup>、②嫉妬（*invidia*）<sup>2</sup>、③憤怒（*ira*）<sup>3</sup>、④強欲（*avaritia*）<sup>4</sup>、⑤怠惰（*acedia*）<sup>5</sup>、⑥貪食（*gula*）<sup>6</sup>、⑦色欲（*luxuria*）<sup>7</sup>と規定した。Laura Ward/Bill Steeds *Demons-Visions of Evil in Art*. London 2007. p.49.  
 (6) ゲルト・ハインツIIモア著、野村太郎他訳『西洋シンボル事典』八坂書房、一九九四年、三三四―三三五頁。  
 (7) 同。  
 (8) *In sprache und poesie heissen äpfel die weiblichen brüste. Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm. Berlin 1852. Bd. 1. Sp. 533.*  
 (9) 田中佳一、佐藤響太「ヤギ乳はヒトにやさしい―ヤギ乳と牛乳の比較―」北海道畜産草地学会編『北畜会報』四八号、二〇〇六年、七九頁。

- 史』原書房、二〇一四年、三七頁。  
 (25) 同、三九頁。  
 (26) 同、四〇頁。  
 (27) 南直人、前掲、一一三―一一四頁。  
 (28) 木下康光著「R・Z・ベッカー『農民のための生活の手引き』(R. Z. Becker: *Noth- und Hülfbüchlein für Bauersleute*) 啓蒙の世紀の忘れられたムストセラー」『言語文化』同志社大学言語文化学会三(三)二〇〇一年、四四―四六七頁。  
 (29) 南直人、前掲、九七頁。  
 (30) 同、九八―一〇〇頁。  
 (31) 世界総生産量二〇二〇年、三、五九〇七万トン。一位中国七八二三、二位インド五二一三〇、三位ウクライナ二〇二七、四位ロシア一九六一、五位米国一八七九、六位ドイツ一七六、三〇位日本二二七万トン。  
 農林水産省ホームページ「いも・でん粉に関する資料」  
[https://www.maff.go.jp/j/seisan/okusan/imo\\_siryou.html](https://www.maff.go.jp/j/seisan/okusan/imo_siryou.html)  
 閲覧日 二〇二三年一〇月八日。  
 (32) 南直人、前掲、一二二―一二三頁。